中臣鎌足の対唐・朝鮮政策―倭国外交を「日本国」外交に転換しようと考えた男―

後藤芳春

　中臣（藤原）鎌足は言うまでもなく中大兄皇子（天智天皇）とともに、645年に乙巳の変で蘇我本宗家を倒したあと、一連の政治改革を推進した人物として認識されているが、その対外政策の姿勢に関しては必ずしも中大兄皇子と軌を一にしていない。

　乙巳の変の翌年（646）、高向玄理が新羅に派遣され、その翌年の647年に新羅の金春秋が「質」として来倭する。当時の新羅は、上級貴族の乱、つまり眦曇の乱が鎮圧された直後で、金春秋としては乙巳の変を鎮圧して王権に権力を集中させた倭国の内情に大きな関心を寄せていたと考えられる。その来倭に際して、鎌足の一族と考えられる中臣押熊が同行した。

　しかし、648年、金春秋は唐の太宗に朝貢、その後は唐の制度を導入して新羅の改革を推進、即位して武烈王と称した。651年の来倭においても唐服を着用したため、倭国は入国を拒否した。

　一方で、650年代前半における遣唐使には、鎌足の長男定恵が派遣され、また、中臣間人老等の中臣一族も唐に派遣されている。

　しかし、周知の如く650年代から660年代前半において、大和王権はその外交姿勢を百済に軸足を置いた姿勢を貫いた。百済の義慈王は、鎌足にも接近する姿勢を見せたが、鎌足は冷淡な姿勢を貫き、百済滅亡後の大和王権による百済復興政策や、その総決算となる白村江の戦いにも、中大兄皇子に対して非協力の姿勢を貫いた。前述の定恵が百済人に毒殺されたり、定恵の弟である不比等が「難を避ける」ために一時田辺史大隅のもとで養育されたのは、百済人等の鎌足に対する反感を想定できる。鎌足が最晩年、天智天皇に対して「軍国」に何ら貢献しなかったと述懐した事は、このような鎌足の百済に対する冷淡な姿勢を反映したものと考えられる。

　668年、鎌足は新羅使金東巌の来倭に対して、積極的に対応している。天智天皇も鎌足にその外交を委ねていたと考えられ、また、660年代後半から670年代初頭には、唐とも交渉している。遣唐使の派遣もみられた。天智天皇も唐と新羅に外交の軸足を点換する姿勢を示したと考えてよい。この外交方針は、壬申の乱（672年）を経て成立した天武天皇のもとで、遣唐使の派遣が一時中止され、新羅使も九州の筑紫を窓口とする外交姿勢がみられたが、鎌足の子不比等の政治力が発揮される８世紀以降、遣唐使が再開されていくように、鎌足の準備した外交方針、それは日本の外交方針として展開していくことになった。